紀尾井だより

7/8

July / August
2024

Vol.166

［インタビュー］
吉田玉男

［公演紹介］
ジェイムズ・エーネス

［新連載］
徳丸吉彦 山口智子 対談
邦楽をたのしもう！（第1回）

連載
［クラシック音楽のテーマに基づく3話］
虫愛づる作曲家たちをめぐる3つの話

紀尾井ホール

ARTIST Interview

人形浄瑠璃文楽・人形遣い 吉田玉男

聞き手／富岡 泰（演劇評論家）

© ヒダキトモコ

9月24日に開催する「和生・勘十郎・玉男 三人会 第三回」。第一回は吉田和生さん、第二回は桐竹勘十郎さんが主役を務めました。第三回は吉田玉男さんが主役で、熊谷直実、政岡の二役を演じます。その吉田玉男さんにお話を伺いました。

――今回、当たり役の熊谷直実（『一谷嫩軍記』）のほかに、女形をぜひ、とリクエストを受けたそうですね。『伽羅先代萩』の乳人政岡を選んだ理由は何でしょう。

私はこれまで「立役一筋」に修業してきまして、女形というとごく若い時に脇役の女中や遊女を遣ったくらいでした。主な役で女形というと、『加賀見山旧錦絵』の岩藤を何回か勤めていますが、八汐首の敵役ですから娘首や老女形首とは性根が違います。今回の「女形を」との文を受けてまず感じたのは、「女形を遣っている自分」を想像しての「照れ臭さ」でしたね（笑）。

――先代玉男師匠（以下、「師匠」で統一）は、第一人者になってからも女形を演じていましたね。

そうですね。二枚目の立役や女形で人形遣いの修業を始めた方ですから、『加賀見山』の尾上などの、「動きの少ない耐える女性」を持ち役としていて、私が左を受け持ったこともありました。その中でも心に残っているのが、昭和55年1月の朝日座で『先代萩』の政岡と、『嫩軍記』の熊谷の二役を勤めた時の舞台です。この時は昼の部で『嫩軍記』の「陣門」から「熊谷陣屋」まで出ずっぱりで熊谷を勤め、夜の部には『先代萩』の政岡を、「竹の間」から「御殿」まで通して勤めています。この時、師匠は60代で体力の充実している時期でしたが、よくこの大役二つを軽々と勤めたものだと感服します。実はこの1月公演のあとの「若手向上会」が、私が熊谷を遣った最初だったのですが、当時28歳で足遣い修行中の私には、鎧を着た人形が重くて、腕が痛くて往生しました。実はこの舞台で初めて主役の主遣いを経験したのです。そういう思い出もあって、今年に入って、熊谷と政岡を遣ってみようと決心しました。今回は栄御前の出から千松の殺し、そして死骸に取り付いて歎くクドキへと続く部分で、三味線の手も多く、大きな動きもあります。動きが多いといっても踊ってしまってはいけませんから、腰をぐっと決めて、人形と人形遣いとで、女らしい線が出せるように頑張ります。女形ならではの振りがたくさんあり、中でも「後ぶり」が二回ありますが、「千年万年待ったとて」のクドキで、上手側に立って後ろ姿を見せる箇所を綺麗に決め、政岡の哀しみを出したいですね。

―― もう一方の熊谷は、二代目玉男襲名の時に演じた由縁のある役ですね。

立役を代表する役の一つですから、初めて勤めた時は緊張しました。師匠が初めて熊谷を遣ったのは昭和44年5月の国立劇場で、私はもう入門していましたが、この時はまだ足を遣っていません。昔は足遣い専門の人形遣いで名手と呼ばれた人もいたようですが、私が入門してからはそうした専門職はなく、順番に足から左、主遣いと修業します。入門したては足だけでなく、ツケ打ちや口上役などを受け持ちますが、こうした裏方を勤めると、芝居の段取りが頭に入るんですね。当時は海外公演も多く、随分こうした役割で勉強させていただきました。師匠が名人初代吉田栄三師匠の足を持ちたくて、いろいろ働きかけた話は有名ですが、私も先輩方にお願いして足を持たせていただきました。

熊谷では、最初の出が難しい。懐手で数珠を持って「立ち帰る熊谷次郎直実」で登場し、後ろを振り向いて桜と制札を見上げ、また正面を向いて、「もののあわれを今ぞ知る」で足拍子を踏んで決まります。この時の熊谷は我が子の小次郎を討ったという思いではなく、あくまで「花の盛りの」若武者を討って無常を感じているという肚で、気持ちを入れて遣っており、足遣いも神経を使うところです。

―― 陣屋に上がって、相模と藤の局に向かっての「物語」が山場ですね。

まず相模に対して「敦盛を討った」と宣言すると、上手から藤の局が斬りかかります。この時の熊谷と藤の局の動き、熊谷が左手で局の裾を払い、倒れた局の背中越しに突き出た刀の鐺を摑んで押さえつけるのが、師匠の工夫した言わば「玉男の型」です。それまでは刀をただ摑むだけだったのを、それでは上手く鐺が摑めないからと工夫したものですが、いかにも師匠らしい理にかなった動きです。

藤の局と相模の間に挟まれて、「その日の戦のあらまし」を仕方話で語るのが、最大の見せ場である「物語」です。数ある「物語」の中でも一番といっていい大きな場面ですから、とにかく小さくならないように、きっぱりと姿勢を維持しようと思います。右手で扇を開き左手に持ち替え逆手に持って決まる、いわゆる「平山見得」などがもたつかないように滑らかにいかないといけません。師匠はとにかくこういうところが上手かった。我々が持つと、人形の手と小道具がずれたりするのですが、本当に人形が持っているようにしか見えませんでした。あと、大切なのは熊谷の目遣いです。「敦盛の首取ったり」と言いながら、実は我が子の小次郎を斬っているわけですから、下手に控えている実の母親の相模を、思わず窺ってしまいます。緊張感に溢れた物語が終わると、肩の荷が下りたような気持ちになりますね。

＜三年連続シリーズ＞第三回

和生・勘十郎・玉男三人会

9/24 火 18:30

［演目］
「一谷嫩軍記 熊谷陣屋の段」
「伽羅先代萩 政岡忠義の段」

［出演者］
太　夫：竹本千歳太夫、豊竹呂勢太夫
三味線：豊澤富助、竹澤宗助
人　形：吉田和生、桐竹勘十郎、吉田玉男
吉田玉翔、吉田簑紫郎、桐竹勘介、吉田玉路
吉田玉佳、吉田簑太郎、桐竹勘次郎、吉田和馬
吉田玉峻、吉田玉延、桐竹勘昇、吉田和登
お囃子：望月太明藏社中

ジェイムズ・エーネス

〝地球上に存在する完璧なヴァイオリニストの1人〟（英デイリー・テレグラフ紙）

ベートーヴェンのソナタ全曲というビッグ・プロジェクトを引っ提げて、ジェイムズ・エーネスが22年ぶりに紀尾井ホールに帰ってきます。この秋のクラシック・シーン最大のハイライト企画です。

ジェイムズ・エーネスが初めて日本に訪れたのは自身いわく1996年。19歳でテラーク・レーベルからCDデビューし話題となった年です。直後の1997年にもジュリアード・オーケストラのコンサートマスターとして来日していました。1998年にはN響にデビューし、以来もう30年近くになりますが、彼の日本での室内楽・リサイタルは2002年の紀尾井ホール公演のほかごく僅かです。

そのためファンの間では「（リサイタルは）海外に行かないと聴けない演奏家」として有名でしたが、この無類に洗練されたヴァイオリニストを日本の室内楽ホールで聴くという夢を紀尾井ホールが実現します。

2002年以来の紀尾井ホール再登場となる今回、22年の空白を一気に埋めるべく、プログラムはベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ全10曲を選びました。同ソナタは2015年から2019年にかけてレコーディングした全集アルバムが名盤の誉れ高く、多くのファンが実演で聴きたいと切望していたものでもあります。

全曲リサイタルに当たってエーネス氏がこだわったのは演奏曲順。番号順としたのは、ベートーヴェンがセットとして作曲した点を重視し、特に作品12（第1～3番）と作品30（第6～8番）をまとめて演奏することが重要と考えるためです。

以下に、その他の作品についても含め、本公演に向けてエーネスが語ってくれた言葉を紹介しましょう。

© Ben Ealovega

初期作品について

――初期作品の魅力はどのような点でしょう。

「初期の作品はどれも完全に革新的で、楽観主義、エネルギー、そしてとてつもない美しさに満ちています。とても技巧的で、素晴らしいコンサート・ピースでもあります。どれもが宝物ですよ」

「どのソナタもヴァイオリンとピアノの楽器間のアンバランスは感じません。最初から真のデュオ・ソナタとして成立している点は注目に値すると思います。ソナタ第1番が両者のユニゾンから始まるのは偶然ではないでしょう」

クロイツェル&第10番

――最終的に彼のソナタはデュオ・コンチェルタンテとして第9番《クロイツェル》の高みに到達しました。

「そう、《クロイツェル》は、そのサイズとヴィルトゥオジテ（高い表現性・技巧性）の点で、孤立・突出しています。間違いなく中期の最高傑作のひとつですね」

「第10番のソナタは魔法のようで、彼の中期と後期を様式的につなぐ重要な作品だと思います。色彩感や幻想性が際立っていて、後期の最初の作品と言えるでしょう」

ソナタと弦楽四重奏曲

――エーネスさんはソナタや協奏曲だけでなく弦楽四重奏曲にも取り組んでいますね。これらの共通点と相違点は？

「四重奏曲は初期から始まり、晩年のもっとも偉大な作品も含まれているため、より完全なサイクルとなっています。ヴァイオリン・ソナタの場合は、四重奏曲とスタートした時期こそほぼ同じですが、最後の第10番は1812年作曲なので、彼の中期の終わり、後期の開始直前までしか作曲を手掛けていません。ただ、初期の四重奏曲と初期のソナタの間には驚くべき類似点があると思います。ベートーヴェンはそれぞれのジャンルで、それまで考えられなかったような、より大きく、より複雑な、何か新しいものを創造しようと努めていたように感じられます」

共演のオライオン・ワイス

「オライオンは私が知っている中でもっとも偉大なピアニストの一人です。最高のヴィルトゥオーゾであると同時に偉大なピアノの詩人でもある。彼とは長年演奏していますが、いつも彼の芸術性からインスピレーションを受けています。今回の紀尾井ホール公演に彼が共演してくれてとても嬉しく思っています」

ジェイムズ・エーネス
ベートーヴェン ヴァイオリン・ソナタ 全曲演奏会

［出演］
ジェイムズ・エーネス（ヴァイオリン）、オライオン・ワイス（ピアノ）

Ⅰ 11/14（木）18:45

Ⅰ 第1番 ニ長調 op.12-1
第2番 イ長調 op.12-2
第3番 変ホ長調 op.12-3
第4番 イ短調 op.23
第5番 ヘ長調 op.24《春》

Ⅱ 11/16（土）14:30

Ⅱ 第6番 イ長調 op.30-1
第7番 ハ短調 op.30-2
第8番 ト長調 op.30-3
第9番 イ長調 op.47《クロイツェル》
第10番 ト長調 op.96

© 堀田力丸

邦楽をたのしもう！

徳丸吉彦・山口智子 対談 1

邦楽との出会い その豊かな世界

今号より、さまざまな視点から邦楽の魅力を探る対談シリーズを5回にわたりお届けします。お話しいただくのは音楽学者の徳丸吉彦さんと俳優の山口智子さん。山口さんは10年間にわたり、地球の音楽映像ライブラリー「LISTEN.」で世界26か国を巡り、250を超える曲を収録されました。世界各地の音に触れた山口さんと、邦楽はもちろん、広く民俗音楽を研究する徳丸さんとの対話から、邦楽との新たな出会いをお楽しみください。

徳丸　お久しぶりですね。

山口　初めてお会いしたのは25年ほど前、紀尾井小ホールでアイヌ民族の伝統芸能『熊送り』の儀式を拝見した時です。公演後にもっとお話を伺いたくて、徳丸さんの楽屋に突撃させていただきました。

徳丸　よく覚えています。山口さんの世代は子どものころに邦楽は聴かなかったでしょう？

山口　テレビの歌謡曲ばかりでした（笑）。生きるパワー溢れる世界の民族音楽を追いかけて世界中を旅してきましたが、地球を一巡りしてやっと「故郷日本の音楽をもっと知りたい！」という境地に至りました。日本は世界中の文化を受け止めて、凝縮し独自に磨き上げてきましたよね。ぜひ邦楽について教えてください！

徳丸　それは嬉しいですね。私の子どものころは箏を習う人もたくさんいて、箏や三味線が家庭に置いてあったものです。長唄の『越後獅子』という曲を軍楽隊が演奏するのを聴いたりもしていました。

山口　庶民の楽しいエンターテインメントとして、邦楽が身近にあったのですね。

徳丸　そうですね。しかも私はクラシック音楽と邦楽の両方を聴いていました。邦楽は1本のメロディで音楽をつくる単旋律（モノフォニー）が特徴ですが、山口さんが訪ねた国々では、複数のメロディを重ねる多声音楽（ポリフォニー）を聴かれたのではないですか？

山口　はい、いろいろな国で声を重ね合わせる多声合唱を聴きました。声で奏でるシンプルな旋律は、やはり心にグッと深く届きますね。

徳丸　その通りですね。邦楽にも声を合わせる音楽がたくさんあります。岩手県遠野市で生まれた『御祝（ごいわい）』は、男性が謡（うたい）を、女性が民謡を同時に歌うという、大変珍しい芸能です。

山口　先生からご推薦いただいて紀尾井小ホールで拝見し、大感動しました！　暮らしの中で培われた声の温もりやたくましさ、掛け合う相手の声を聴きながら、自分の旋律の役目を果たす絶妙な技。共同体として日々を生きるうえで、声を合わせて心を一つにすることが大事なのでしょうね。

徳丸　そうですね。一方、邦楽器の曲では、日本各地で箏、三味線、尺八による三曲合奏と呼ばれるものが演奏されています。ヨーロッパでいう弦楽四重奏みたいなものです。演奏している人がたがいに声を聴き合って演奏するのですが、合わせるのがとても難しいんです。その代表曲のひとつに『笹の露』があります。お酒の素晴らしさを題材にした曲で、露はお酒のこと。海外公演でもよく演奏されます。

山口　お酒は古代から神に捧げる聖なるものであり、自然に感謝する祭りや伝統儀式に欠かせないものですよね。

徳丸　日本でも古来より、お酒が造られてきたわけですが、それを音楽にするというのが面白いと思います。こうした身近な接点から邦楽を聴いてみると楽しいですね。

文／芹澤一美（音楽ライター）

徳丸吉彦（とくまる・よしひこ）
紀尾井ホール邦楽専門委員。聖徳大学教授、お茶の水女子大学名誉教授。音楽学、とくに民族音楽学を専攻。日本とアジアの音楽を国内外で紹介。日本音楽と西洋音楽を愛好する家庭で育つ。令和4年瑞宝中綬章受章。最近の著作は、徳丸吉彦他・編『事典 世界音楽の本』（岩波書店、2007年）、『音楽とはなにか 理論と現場の間から』（岩波書店、2008年）、『ミュージックスとの付き合い方 民族音楽学の拡がり』（左右社、2016年）、『ものがたり日本音楽史』（岩波書店、2019年）

山口智子（やまぐち・ともこ）
1988年にNHK連続テレビ小説『純ちゃんの応援歌』で俳優デビュー。近年は映画『春に散る』（2023年）、ドラマ『監察医・朝顔』（'19、'20年）に出演。2010年から10年をかけて世界を旅し、美しい音楽文化をライブラリーに収めるプロジェクト『LISTEN.』を開始し、10年間の音楽を追う旅を綴った書籍「LISTEN.」（生き延びるブックス）を発刊。2022年、旅を通して文化を伝える業績を称える「兼高かおる賞」を受賞するなど幅広い活動を行っている。

対談の模様はYouTubeでご覧いただけます。

https://youtu.be/zyu0NVHdNAo

THE CAPITOL HOTEL TOKYU

協力：ザ・キャピトルホテル 東急

クラシック音楽のテーマに基づく3話

虫愛づる作曲家たちをめぐる3つの話

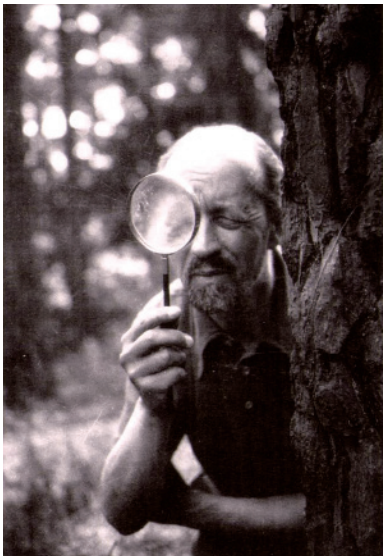
長い歴史の中で音楽家の心を捉えた魅惑の「虫」たち。虫を題材に数多くの音楽作品が残されています。今回は、虫を愛した作曲家をめぐる3つのお話です。

1 フランスの作曲家の感性を刺激する、虫を題材とした文芸作品

一枚の写真があります。木の陰に隠れて身を乗り出しながら、虫眼鏡を構えている男性。その名はアルベール・ルーセル。バレエ＝パントマイム《蜘蛛の饗宴》の作曲に取り組んでいた時期の姿と伝えられます。これは別に公演の宣伝用にとったポーズではなく(!)、庭に出ては虫たちを観察するのが彼の日常の楽しみでした。愛読書がアンリ・ファーブルの『昆虫記』だったというから筋金入りですね。

同じフランスが生んだ、自然観察に基づく文芸作品として挙げられるのがジュール・ルナールの『博物誌』。ファーブルが学術研究的な態度を基本としているのに対して、詩的なニュアンスに富む文体が特徴です。そこから5篇を選んで、モーリス・ラヴェルが書き上げた歌曲集《博物誌》に「コオロギ」が登場します。虫の鳴き声や仕草を描写したピアノ伴奏パートの繊細な響きは彼一流のもの。

ちなみにラヴェルが尊敬を捧げていた先人エマニュエル・シャブリエは、フランスの女流作家ローズモンド・ジェラールの「セミ」という詩に曲を付しています。「セミたちはヴィオールよりも心が深く、ヴァイオリンよりも上手に歌う」というフレーズが何度も繰り返される、小さな命に捧げた讃歌。そこにフランス的な美意識の反映も見てとれます。



アルベール・ルーセル、1936年

2 「ワルツ王」と虫の関係

ワルツ王として名高いヨハン・シュトラウス二世に、レントラー風ワルツ《蛍》という作品があります。タイトルを直訳すると「ヨハネの甲虫」。蛍はヨーロッパで夏の聖ヨハネ祭(6月24日)を象徴する虫とされているのです。夜のしじまにきらめく蛍の光を思わせる導入部からして魅力的で、演奏の機会に恵まれないのが不思議なほど。やはりシュトラウスが幸運のシンボルとされる虫を題材にして作曲したワルツ《てんとう虫》も、なぜか知名度は低いまま。これはひょっとしたら、兄をしのぐ才能とうたわれながら早世した弟、ヨーゼフ・シュトラウスにポルカ・マズルカ《とんぼ》という傑作があるため(ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートでカルロス・クライバーが極上の名演を聴かせたことでも有名ですね)、「昆虫勝負」では分が悪いと決めつけられているせいかも?

3 蜂のいろいろ

虫の名をタイトルに含む曲でもっともポピュラーなもの、それはニコライ・リムスキー＝コルサコフの《熊蜂の飛行》で決まりでしょう。元々は歌劇の中の一場面ですが、ヴァイオリン独奏用の編曲版で人気を博しました。ほかの楽器のプレイヤーも、曲芸的なテクニックを披露するためにチャレンジしたりしています。

蜂を描写するのはヴァイオリンの専売特許ではありません。ベンジャミン・ブリテンがオーボエとピアノのために書いた《2つの昆虫の小品》は、第1曲が「バッタ」、そして第2曲が「スズメバチ」。忙しく動き回るピアノを従えながら、オーボエがブーンブーンという高い羽音を模した音形を吹き連ねます。野外にいるときにいきなり耳元で聴こえてきたら「ヤバい!」と思えるような……。

そして同じオーボエが延々と4分以上も休みなく急速な走句を奏でながら、この虫の飛翔中の姿をありありと眼に浮かび上がらせてくれるのが、アントニオ・パスクッリの《蜂》。鼻から息を吸いながら音を出す循環呼吸の技巧を駆使しないと演奏不能な、19世紀を代表する名手にして、オーボエのパガニーニと呼ばれた歴史的奏者の面目躍如たる作品です。

文／木幡一誠(音楽ライター)

《蜘蛛の饗宴》をめぐる

紀尾井ホール室内管弦楽団 第140回定期演奏会

[出演]
ピエール・デュムソー(指揮)
ニコラ・アルトシュテット(チェロ)

9/20(金) 19:00　9/21(土) 14:00

[曲目]

ルーセル	交響的断章《蜘蛛の饗宴》op.17
プロコフィエフ	交響的協奏曲ホ短調 op.125
ビゼー	劇付随音楽《アルルの女》第1組曲・第2組曲

天皇ご一家
紀尾井ホールにご来場

5月29日(水)に開催された「ヴィオラスペース2024」(主催・テレビマンユニオン)に、天皇、皇后両陛下と、長女愛子さまがご来場されました。

文化庁 劇場・音楽堂等における子供舞台芸術鑑賞体験支援事業
《こども招待》のご案内

日本製鉄文化財団では、2024年度秋以降の一部主催公演について《こども招待》を設定し、小学生以上18歳以下の方(以下、こども)を入場料無料で招待します。また、こども2名までにつき保護者等の同伴者(《同伴保護者》)1名まで定価料金の半額で鑑賞できます(中高生は同伴保護者なしでも可)。

※決済手数料・発券手数料・システム利用料は別途申し受けます。
※各公演発売日より先着順、上限に達し次第受付終了。

対象公演・詳細は
紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。
https://kioihall.jp/kodomo2024fy

なお、《こども招待》の対象となっていない主催公演には《紀尾井みらいシート》を設定しています。こちらもぜひご利用ください。

トレヴァー・ピノック
紀尾井ホール室内管弦楽団 首席指揮者
任期延長のお知らせ

2022年度より紀尾井ホール室内管弦楽団首席指揮者、トレヴァー・ピノックの任期を、3年間(2028年3月まで)延長することを決定いたしました。トレヴァー・ピノックが紀尾井ホール室内管弦楽団(KCO)にデビューしたのは、2004年10月(第46回定期演奏会)。以後、昨年2020年2月の特別演奏会を含む計5回の客演を経て、2022年度シーズンより首席指揮者に就任しました。2025年からの第2期では、紀尾井ホールの休館が挟まれますが、KCOとピノックはその期間はもちろん、2027年リニューアル・オープンの年もともに歩みを進めてまいります。氏とのパートナーシップをさらに積み上げてゆくことでKCOの一層の充実を多くの音楽ファンの皆さまにお届けしたいと願っております。どうぞご期待ください。

マエストロ トレヴァー・ピノックより就任メッセージ

紀尾井ホール室内管弦楽団(KCO)の首席指揮者として2期目もお声掛けいただき、感激するとともに光栄に思っています。KCOと紀尾井ホールは、私にとって特別な場所です。KCOとは2004年に初めて共演し、2012年からは定期的に客演するようになりました。そして年を重ね、音楽的信頼という特別な関係が築かれ、私たちは音楽作りに冷静に集中することができ、また楽しみながら真摯に取り組むことができるようになりました。また、紀尾井ホールという完璧な環境と、素晴らしいスタッフに恵まれていることも幸運です。今後は私の首席指揮者としての第1期が終わるのを記念して、オペラ《コジ・ファン・トゥッテ》を演奏会形式で演奏します。私の第2期に目を向けると、ホールの改装もあり、オーケストラにとってエキサイティングな時期になると思います。この紀尾井ホールとKCOの30年間の大切な遺産を守りながら、ともに明るい未来を切り開いていけると信じています。

© Gerard Collett

今号の表紙
演奏会、そして演奏家を舞台裏で支える

当ホールには、開館当初よりホール専属のステージマネージャーがおります。ピアノや譜面台などのセッティングはもちろん、オーケストラの座席配置を検討・助言したり、リハーサル時には演奏者の立ち位置をアドバイスすることもあります。演奏者に舞台へ出る合図(キュー)を出したり、照明や音響にキューを出したりと、まさに、コンサートを進行する上で重要な役割を担っています。

紀尾井ホールにご支援いただいている企業および個人の方々です

紀尾井サポートシステム会員(五十音順・「株式会社」等表記及び敬称略)

《特別協賛会員》住友商事／日鉄ソリューションズ／三井不動産／三井物産／三菱商事／三菱地所
《みやび会員》 伊藤忠商事／大島造船所／鹿島建設／商船三井／菅原／住友商事／Dr.かすみ永田町クリニック／日本郵船／丸紅／三井住友銀行／三井住友信託銀行／三井不動産／三井物産／三菱商事／三菱地所／メタルワン
ほか匿名2社
《ひびき会員》 大林組／オカムラ／高砂熱学工業／竹中工務店／東京きらぼしフィナンシャルグループ／山下設計
《みどり会員》 青鬼運送／赤坂維新號／今治造船／ヴォートル／エーケーディ／荏原冷熱システム／ザ・キャピトルホテル 東急／三協／清水建設／上智大学／西武リアルティソリューションズ／大成建設／千代田商事／テェイスト・ライフ／東芝ライテック／永田音響設計／ニュー・オータニ／ハウス食品グループ本社／パナソニック／みずほ証券／三菱UFJ銀行／三菱UFJ信託銀行／三菱UFJモルガン・スタンレー証券／ミュージション／明治座舞台／ヤマハサウンドシステム／ワークショップ21
《あおい会員》 青木陽介／浅沼雄二／淺見 恵／石崎智代／磯部治生／伊藤眞理子／井上善雄／岩城宏斗司／上野真志／馬屋原貴行／大内裕子／大垣尚司／大久保なほ子／太田清史／小川 保／小倉 ヒロ・ミヒャエル／糟谷敏秀／片山國正／片山能輔／加藤巻恵／加藤優一／神川典久／川口祥代／川島知恵／菊池恒雄／木谷 昭／楠野貞夫／栗山信子／河野紗妃／小坂部惠子／斎藤公善／齋藤幸子／坂詰貴司／坂根和子／佐久間庸行／佐部いく子／澤田紀子／潮崎通康／柴田雅美／清水 正／清水多美子／清水康子／白土英明／末岡明武／鈴木順一／鈴木 亮／高下謹壱／田中 進／戸田純也／中塚一雄／中西達郎／中野洋子／中村健司／中山昌樹／原田清朗／藤村行俊／冬木寛義／北條哲也／堀川将史／牧本惠美子／松枝 力／松尾芳樹／松本美恵／丸井正樹／水口美輝／簑輪永世／宮島正次／宮田宜子／宮武悦子／宮原 薫／宮本信幸／陸田 実／村上喜代次／村上敏子／持留宗一郎／八木一夫／八木晶子／矢田部靖子／山内寿実／山口 彰／山口 聡／吉田季光／吉見 亨／渡邊一夫
ほか匿名46名　計246口　(2024年6月1日現在)

特別支援会員(五十音順・「株式会社」等表記略)

アステック入江／五十鈴／NS建材薄板／NSユナイテッド海運／NSユナイテッド内航海運／エヌエスリース／エヌテック／王子製鉄／大阪製鐵／九築工業／草野産業／黒崎播磨／合同製鐵／鴻池運輸／小松シヤリング／山九／産業振興／三晃金属工業／サンユウ／三洋海運／山陽特殊製鋼／ジオスター／新日本電工／スガテック／大同特殊鋼／大和製罐／高砂鐵工／高田工業所／鶴見鋼管／DNPエリオ／テツゲン／電機資材／東海鋼材工業／東邦シートフレーム／トピー工業／日亜鋼業／日鉄SGワイヤ／日鉄エンジニアリング／日鉄片倉鋼管／日鉄環境／日鉄ケミカル&マテリアル／日鉄建材／日鉄鋼管／日鉄鉱業／日鉄工材／日鉄鋼板／日鉄興和不動産／日鉄スチール／日鉄ステンレス／日鉄ステンレス鋼管／日鉄精圧品／日鉄精密加工／日鉄ソリューションズ／日鉄テクノロジー／日鉄テックスエンジ／日鉄ドラム／日鉄物産／日鉄物流／日鉄プロセッシング／日鉄保険サービス／日鉄ボルテン／日鉄溶接工業／日鉄レールウェイテクノス／日本金属／日本触媒／濱田重工／富士鉄鋼センター／不動テトラ／北海鋼機／幕張テクノガーデン／三島光産／宮崎精鋼／吉川工業／ワコースチール
日本製鉄　(2024年6月1日現在)

紀尾井だより 7～8月号 2024年(令和6年)7月1日発行[隔月発行・通巻166号]●企画・編集発行：公益財団法人 日本製鉄文化財団 内田勇人●編集・デザイン・印刷：株式会社 エイチ・アンド・アール プロモーション

フォトレポート

3.3(日) ユリアンナ・アヴデーエワ ピアノ・リサイタル

© 武藤章

ショパンとリストの名曲をそれぞれ晩年から遡る形で配されたプログラム。特に後半のリストに反響が大きく、鳴りやまない拍手に何度も何度も丁寧に笑顔でカーテンコールに応えていました。凛とした佇まいも印象的でした。

3.19(火) 紀尾井レジデント・シリーズ Ⅰ 葵トリオ(第3回・最終回)

© 堀田力丸

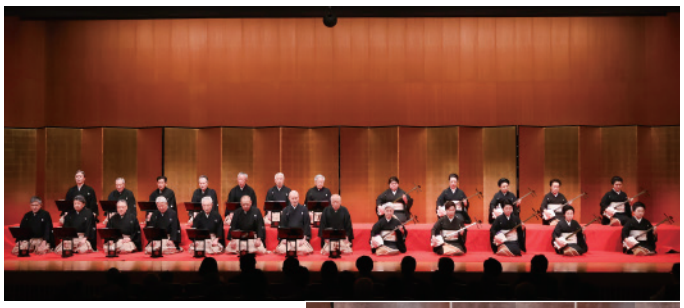
3年にわたってシューマンをテーマに取り組んだ当シリーズを見事完遂しました。演奏会のたびに目覚ましい進化を遂げる彼らはこれからも目が離せません。10/3には紀尾井ホールに再登場します。お楽しみに！

3.24(日) 邦楽 明日への扉 第4回 都了中(一中節)

© 堀田力丸

邦楽の中で「古曲」と位置付けられる一中節を現在に受け継ぐ、都了中のリサイタル。曲の合間にはご本人が幕前で曲目解説も行ない、一中節の魅力が存分に伝わってくる会となりました。

4.4(木) 江戸で生まれ江戸で流行した河東節 山彦千子をきく会(河東節)



こちらも「古曲」の一つ、河東節の山彦千子をじっくりと聴く会。江戸っ子気質の粋で艶やかな三味線の音色、そして「助六」では舞台いっぱいに並んだ旦那衆の迫力ある唄で会場を圧倒。対談では山彦千子さんのチャーミングな一面も垣間見られました。

© ヒダキトモコ

4.19(金)・20(土) 紀尾井ホール室内管弦楽団 第138回定期演奏会

© 堀田力丸

アンケートより

古典から、現代のルトスワフスキと絶妙の組合せ。アンデルシェフスキの繊細で優美なピアノ。ダイナミックレンジの豊かな表現。締まった芯のある確信に満ちた響き、それを引き出した素晴らしい指揮。指揮者の素晴らしい音楽性とそれに応えたオケに感動しました。

4.26(金) 紀尾井レジデント・シリーズ Ⅱ 川口成彦(第3回・最終回)

© 武藤章

アンケートより

昨年初めて川口さんの演奏を拝聴して、ピリオド楽器の音色の素晴らしさと川口さんの技術力の高さに感動し今回も楽しみに足を運びました。あまりの美しさに涙が溢れ、心が喜ぶのを実感する、光で満たされるようなとても素晴らしい演奏でした。ヘクサメロンでは本当に魂が震えました。

チケットのお申込み

紀尾井ホールウェブチケット　https://kioihall.jp/tickets

お知らせ　チケットぴあ、イープラス(クラシック公演のみ)
CNプレイガイド(電話予約:0570-08-9999/10:00～18:00年中無休)
でもチケットを取り扱っています。

紀尾井ホール
公益財団法人 日本製鉄文化財団
〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町6番5号
TEL.03-5276-4500(代表)　FAX.03-5276-4527　https://kioihall.jp

公演の最新情報などはこちら